

# シェキに来て、見て、愛して

ムサ・マルジャンリ、  
編集長

アゼルバイジャンの北部の高山の合間にシェキは位置する。この町は山間の谷深くに隠れているため、濃く生い茂った緑の中から赤い瓦屋根と頂上部分が三日月で飾られた先の尖ったミナレットが見えるのみである。様々な言語を話す観光客が賑わう町の中心地に対し、郊外の通りは静かで、1日の大半は人がいない。

シェキは快適で、魅力あふれる町であり、いい意味で鄙びている。この時間はこの町独自ののんびりしたリズムを刻み、まるで中世初期の様相を変えていないかのような町の一区画に出てくると、時間はその無慈悲な歩みを全く止めてしまったように感じられる。シェキの生活はとても落ち着いてのんびりしているため、ここに暮らす住民たちは大きな世界のどんな悩みも知らなかったかのようにある。髪を逆立てたような銃眼を持つシェキ要塞の壁でさえも、罪のない田園風景の飾り物にしか見えない。

シェキは、紀元前2世紀のアジアからヨーロッパまでの大陸を横断する古代の商業路シルクロードにある町だ。それまでもこの町はおそらく中国とインド、ひょっとすると日本とさえも商業関係を持っていたかもしれない。このことは、キュデュルリュのクルガン（紀元前17世紀）でキイロダカラの貝殻が発見されたことにより裏付けられる。この貝はかつてこのあたりの国々で貨幣として用いられていたものだ。かつてシェキの広場では巨大なバザールが賑わい、商人たちは何十もの言語や方言で自分のテントに客

を呼び込み、香辛料の不思議な匂いや、贅沢な生地ของ虹のような光沢や、宝石の輝き、異国の地の刀の鋭さで客たちを惹きつけていた。ここでは、中国産の絹がロシア産の毛皮と交換され、ギリシアの金のブレスレットがバルト海の琥珀と、ブハラของ絨毯がスカンジナビアからの皮製品と交換された。

現在のシェキは美しく、独特で、この町を散歩するのは『千夜一夜物語』の世界に旅するような魅力がある。愛想がよく、喜びに満ちた町で、町の通りはこの上なく素晴らしいシェキ料理の匂いで満ち溢れている。この町にいれば文字通り毎分ごとに新しい発見をプレゼントしてくれる。

シェキの誇りであるハーン宮殿は、この町を引き立てている。宮殿はシェキ人の才能のシンボル、何世紀にも渡るアゼルバイジャンの職人の仕事の最高峰となった。ホールของ壁画、宮殿の窓の透かし網模様を愛で、そしてもちろん、古代シェキの小道を歩き、シェキ要塞に上り、隊商宿、回教寺院や、さらに古きアルバニアのキリスト教寺院を眺めるために、ますます多くの人がこの町にやって来る。時間は、特に説得力がある。人間の多くの創造物の中から、時間はあら探しをしながら最高のもを選び出すからだ。建築家、芸術家、作家たちの創造物が、人類の進む果てしない道の道標となるために。

ムサ・マルジャンルイ